

# 教育と教育者の人生経験の相関性

—ひとりの高等学校教師のライフヒストリーから—

法政大学キャリアデザイン学部教授 児美川 孝一郎  
法政大学人間環境学部 1 年 定 絵里加

## はじめに

日本の未来を担うのは、現在の子どもたちである。グローバル化が進展し、人々が多様な生き方をするようになった今日の社会において、子どもたちは専門性や個性を備えた多様な人材に成長することが望まれている。子どもたちの成長に影響を与える要因には、先天的に持って生まれるものもあれば、教育や人生経験などを通して後天的に形成されるものもある。それゆえ教育現場では、生徒 1 人ひとりの個性を引き出すアプローチの探求が精力的に行われている。

大阪大学大学院人間科学研究科の志水宏吉氏は、「学力形成に対する『社会関係資本』の重要性」(志水 2010, 640 頁)を提唱し、人間関係や他者とのつながりが読み、書き、考える力などの広義の学力に影響を与えていると指摘している。身近な家庭環境や学校生活が、子どもたちの成長に最も強く影響を与えているというのである。日本の初等中等教育は、文部科学省の定める学習指導要領に沿って、体系的かつ画一的に行われていると言えよう。しかし、学習指導要領体制における指導方法であっても、志水氏は、子どもたちの「広義の学力」を形成する過程において、教師と生徒の間に築かれる人間関係が与える影響力の重要性を説いているわけである。

生徒に影響を与える教師側の要因は、教育方法、基礎知識などの教師としての職能に関わるものと、人間性や人柄といったパーソナリティに関わるものとに大別できる。前者

は、教職課程や教師としての職業キャリアを通して身に付けていくものであるのに対し、後者は、教師がこれまで歩んできた人生を通して培っていくものであると言える。もちろん、これら 2 つの要因は独立しているのではなく、相互に影響を与えながら複雑に絡み合っているものと考えられる。そうであるとしても、1 人の教師が抱く教育方針や実際に施す教育には、教師としてのキャリアだけでなく、その教師自身の人生全体が影響していると言える。言い換えれば、1 人の教師が生徒に教育的アプローチを行う際には、教師自身の人生経験や、その際に抱いた感情、考えたこと、さらにはその出来事を後の時点で振り返った省察などが、潜在的にはそのアプローチの仕方に影響しているということである。

そこで本稿では、ある 1 人の高等学校の教師の人生経験に着目し、そこから紡がれた対象者の人生観が、一般的な教育方針や教育原理などを越えた、1 人の人間としての教育的信念や教育的アプローチに、どのような影響を与えているかを検討してみることにする。

なお、教師のライフヒストリーについての先行研究は、稲垣ほか(1988)、塚田(1998)、山崎(2002)をはじめとして枚挙に暇がない。本稿の共著者である児美川も、これまで児美川・白井(2007)、児美川・古市(2008)を発表してきた。本稿も、これらの研究に連なりつつ、教師のライフヒストリー研究を通じて、アイデンティティ問題と教師としての職能や実践の関係に迫ろうとする事例研究のひとつである。

## 1章 調査対象者について

東京都の私立 A 高等学校に勤務する男性、B 教諭を対象にヒアリング調査を行った。B 教諭は、現在 2 児の父親であり、38 歳である。A 高等学校においては、国語科の教師として教鞭をとり、野球部の顧問として部活動の指導にあたっている。インタビューは、2011 年 6 月 20 日に、A 高等学校の会議室において 1 時間程行った。インタビューを行った会議室は、対象者のプライバシーが守られる環境であった。

B 教諭の略歴は以下の通りである。

15 歳	東京都私立 A 高等学校入学
18 歳	東京都私立 A 高等学校卒業
18 歳	東京都私立 C 大学文学部国文学科入学
22 歳	東京都私立 C 大学文学部国文学科卒業
22 歳	埼玉県私立 D 女子高等学校（現・D 女子高等学校）の講師に
23 歳	東京都私立 A 高等学校の教員に
30 歳	結婚
現在	東京都私立 A 高等学校教員・2 人の女の子の父

以下、B 教諭の主として高校入学以降のライフヒストリーを、教諭自身の言葉も借りながら追ってみる。

B 教諭は、中学校卒業後の進路を決定する際、勉学に励みながら野球に打ち込むことができる学校に志望を据え、志望校を決定した。しかし、その希望に合致する第 1 志望や第 2 志望の学校は、残念ながら不合格に終わった。それゆえ、B 教諭は後に就職することになる A 高等学校に、両親に勧められ受験していたためという理由から進学することとなる。

A 高等学校入学後、元来、本を読むことが好きであった B 教諭は、「自分の担任でもあった国語の先生の影響を受け、国語科の教員を志すようになった」と振り返っている。やがてその志は、読み継がれている文学や古典

を媒介に、生徒に何かを伝えたいという使命感に変わった。

「国語科の教員になりたい」という夢ができた B 教諭は、高等学校卒業後の進路を考えるようになった。A 高等学校は A 大学の付属高校であるため、内部進学制度を利用して大学に進学することも可能であった。しかし、A 大学には、国文学科が設置されていないため、他大学受験を志すこととなる。受験勉強の最中は不安に駆られることもあり、「あしたのことまで思い悩むな、あしたのことはあした自らが思い悩めば十分である」という聖書のことばに、心が救われる思いがしたと振り返っている。B 教諭は、教育分野に定評のある国立 E 大学や私立最高峰の F 大学などを志望していたものの、合格には至らなかった。そして、併願校として受験していた G 大学と C 大学に合格した。G 大学は国文学の研究を起源とする大学であるため、国語科の教員になるためには G 大学に進学するほうが圧倒的に有利であるという認識はあったものの、C 大学のパンカラな雰囲気と六大学という知名度に憧れを抱き、C 大学文学部国文学科に進学することを決意したのである。

B 教諭は C 大学に入学後、「野球サークルに入りその仲間との野球の練習や集いに参加し、大学生活を楽しんでいた」という。もちろん、授業にも積極的に参加していた。しかし、2 年生に進級した頃には、「勉強する意味を見失い、次第に教室から足が遠のいていった」と振り返っている。2 年、3 年次には、勉強から逃避するために、野球サークルの活動やアルバイトにのめり込んでいき、授業への欠席が目立つようになっていった。「単位を落としている」という焦燥感があったものの、文学部の授業に全く関心が持たなくなってしまっていたのである。その結果 4 年次には、卒業要件を満たすべく、週に 4 日大学に通うこととなった。しかしながら、単位修得のために授業に出席してみると、「次第に授業の内

容にも興味を持てるようになっていった」と振り返っている。

B 教諭は、大学の授業と並行して就職活動を開始した。教育の現場において、生徒が生徒として過ごす最初か最後の機会に関わりたいという想いと、野球部の指導をしたいという想いの両方を叶えるべく、高等学校の教師を志すようになった。『生徒』として過ごす最後の機会であるからこそ、伝えられることと、伝えなければならないことがある」と感じていたと振り返っている。B 教諭自身が当時男子校であった A 高等学校や、男子が構成割合の多くを占める C 大学の出身だったこともあり、公立高等学校や私立の男子校、共学校に絞って就職活動を展開していった。その中から、A 高等学校ともう 1 校の最終面接まで残ったものの、内定には至らなかった。そこで年が明けた頃、B 教諭はそれまでエントリーしてこなかった女子校にも対象を広げ、募集を継続している学校に応募したのである。応募した高校のうち、私立の D 女子高等学校から内定をもらい、国語科の講師として勤務することとなった。

大学卒業後、B 教諭は D 女子高等学校へ勤務する日々を迎えた。高等学校の教師になりたいという夢は実現できたものの、実際に勤務してみると「職場に違和感を覚えるようになっていった」と振り返っている。B 教諭自身が高校、大学時代を過ごした A 高等学校や C 大学は、あけすけな発言が許される校風であった。しかし D 女子高等学校は、一族が代々校長を務める世襲的な経営体制であったため、そのような発言は許されず窮屈な思いを抱いていたのである。また、かねてから目標としていた野球部の指導を行い、部活動において生徒の精神力を鍛えるということができていないという思いもあった。

そこで、B 教諭はもう 1 度就職活動を行うことを決意したのだという。2 度目となる今回は働きながらの就職活動であったため、A

高等学校に絞って応募することにした。大学在学時には最終面接において涙を呑んだものの、講師経験を 1 年経たこの年、国語科の教師として A 高等学校の内定をつかんだのである。

B 教諭は、教師になってから文学に触れる機会を大切にするようになった。大学在学時に勉学を怠ったという負い目があるため、授業の準備に時間をかけたり、読書に励んだりと意識的に文学との関わりを持つようにしていたという。たとえば、授業において『枕草子』の一段を教えるのなら、『枕草子』全体を読破するなど、俯瞰的な視点で文学の世界や、そこから読み取れるメッセージを生徒に伝えられるように努めていた。

現在は、A 高等学校において国語の授業で教鞭を執り、野球部の顧問として指導にあっている。

## 2 章 人生の転機と対処法

B 教諭のライフヒストリーを振り返ってみると、B 教諭の人生における転機は 3 度あると言える。

1 度目の転機は、大学において、ゼミの教授と出会ったことである。授業やゼミに出席していなかったため、単位修得のために行くようになってからも教室の端で目立たないようにしていた。勉学に勤しんでこなかったため、卒業論文も表面的で内容がないものになってしまったと振り返っている。そして、教師として生徒と接し自身が大人になったと感じたとき、ふと卒業論文を読み返してみたという。後から振り返ることにより、あの時自分は教授に「許された」と感じたと言う。内容や完成度に拘わらず、大目に見て単位をくれたと気付いたのである。

現在は、世の中全体の風潮として他者を「許す」ことが困難な時代となってきている。しかし、自分が子供だったころ、まだ世間には

周囲の人を「許す」余裕があった。自分は、ゼミの教授をはじめ多くの人に許されて生きてきたのだ、と気付いたことにより、今度は自分が生徒を「許す」立場にあると思うようになった。飲酒の現場を目撃しても、停学などの措置を取らず「ほどほどにしろよ」という注意にとどめたり、進級に関わる成績の生徒に何とか留年を免れる評価を与えたりするなど、生徒を「許す」指導を心掛けているという。

2度目の転機は、A高等学校に勤務し7年が経過した頃訪れた。生徒と教師、そして、生徒の集合体であるクラスと教師の関係は、人間同士の付き合いである。もちろん、仕事であるため、全ての生徒のことを大切に考え、どのような雰囲気のクラスであっても全力で指導にあたらなければならないものの、人と人の関わり合いである以上、担任を持っていると、波長の合うクラスと合わないクラスも存在する。

しかし、この年に担当した2年生のクラスとは「波長がピタッと合った」と感じた振り返っている。波長の合うクラスを担当することにより、自分が理想としていたクラスや教育の在り方が肯定されたように感じた。自らが目標にしていた理想に近づくことができ、逆に教師人生の原点に立ち返ることができたのである。原点を再確認することにより、このように教員をやっていききたいという目標が明確になったと言う。また、この年に結婚したこともあり、今後の人生の見通しを意識するようになった年であったと振り返っている。

そして3度目の転機は、子供が生まれたことである。子供を持ち、自らが保護者となることにより、親のこと保護者のことが分かるようになった。「どのような点を心配するのか」「どのように子供のことを考えているのか」、それまでは頭の中においては、理解していた。しかし、自身が保護者となることにより、気持ちの上でも分かるようになったと言

う。自身の心情と重ね合わせることにより、保護者に対してもきめ細かい対応が可能となったのである。

また、子供と公園で遊び、子供が幼稚園に通うようになる中、多くの幼児と触れ合う機会を得たという。子供の友達などと関わることにより、生徒の成長の過程を想像することが可能になったのである。1人ひとりが、どのように成長し高校生になったのかを想像することにより、B教諭にはそれまで分からなかった部分が見え、より生徒のことを理解できるようになったのである。

### 3章 考察

本稿では、高等学校の教師の人生に着目し、対象者の人生観が、教育方針や教育原理などを超えた1人の人間としての信念や生徒への教育的アプローチにどのような影響を与えているかを検討した。

その結果、明らかになったことは、教員の人生経験そのものが教育に反映されるというよりは、むしろ経験を振り返り、どのような意味付けをしたのかが、教育方針や指導方法に影響を与えているということである。生徒へのアプローチの仕方に影響を及ぼしているのは、教師の成功体験の有無ではなく、自身の成功や失敗さらには挫折を含めたこれまでの軌跡にどれだけ真摯に向き合い、そこから何を見出しているかということである。

大学在学中、B教諭は授業やゼミの出席を怠り、留年する可能性さえあった。勉学に勤しんでいなかったため、卒業論文の出来は散々なものであったと振り返っている。論文の完成度に拘わらず、単位を認定してくれた教授に、B教諭は「許してもらったんだ」と気付いたと言う。自身の経験を振り返り、許されたと気付いたからこそ、現在生徒を許す指導が出来ているのである。

もちろん、生徒の失敗に対して処罰や評価

を含めた措置をとることもできる。教師として厳しい判断を迫られることもあろう。しかし、B教諭の「許す」という行為は、単なる甘やかしや黙認ではない。生徒が失敗し人生のルールから外れかけてしまったとき、やってしまったことも含め生徒の全てを包み込み、自ら立ち直るきっかけを与えているのである。頭ごなしに叱ったり、すぐに処罰を与えたりするのではなく、時間をかけて何度も話を聞き、生徒自ら自己の失敗に気付けるよう指導しているのである。

高校生が、飲酒や喫煙をしたり、留年の危機に陥ったりするには、何らかの原因がある。もちろん、ただ羽目を外してしまったり、学力に問題があったりする場合もある。しかし大抵の場合は、反抗的になっていたり、劣等感を抱いていたり悩んでいる場合が常である。その根本的な問題を解決すべく、じっくりと話を聞き、時には全力で叱り、真正面から生徒と向き合っているのである。生徒の行為を許し、生徒の過ちを教師自らの責任として1人ひとりに逃げずに向き合うことにより、生徒に自らを見つめ直させ、自立と自律ができるように指導しているのである。

この体力と気力を要する「許す」指導は、ゼミの教授との出会いと教授に「許された」ことに気付くという転機によって確立された。ゼミの単位を落とし人生のルールから逸れてしまっていたら、今の自分の人生はなかったという思いが、今日も生徒に真摯に向き合う原動力となっているのである。

また、教育分野に限らず、キャリア形成一般に通ずるものとして敷衍できることは、失敗からも学ぶ姿勢を持つことである。B教諭の指導の要である「許し」、生徒と向き合うアプローチは、成功体験とは言い難い大学生活を振り返ることによって確立された。人生において人を成長させるのは成功体験を積み重ねる以上に、1つひとつの経験に対する自らの対処である。成功体験だけが、人生を作り

上げる要素ではないのである。私はこれまで、結果を出すこと、自らが設定した目標を達成することこそが大切であると思ひ努力してきた。もちろん、目標を設定しそれを達成することは重要であるものの、成功を追い求めるだけでなく、自らの失敗から学べる人間でありたいと思う。

さらに得られた知見としては、他者の存在という意識の大切さである。自らの失敗から学ぶということは、他者の存在を意識することでもあるのである。失敗から学ぼうとすると、失敗を許してもらったりフォローしてもらったりと他者に支えられて生きていることを実感できるようになる。B教諭は、完成度の低い論文に合格点をつけてくれた教授に対し「許してもらった」という感謝の気持ちを持っている。他者に育ててもらい今の自分があるという意識があるからこそ、現在長い時間をかけ生徒にじっくりと向き合う「許す」指導が出来ているのであろう。自分は他者に育ててもらったと感じることにより、感謝の気持ちを持てるようになる。周囲に感謝することは、周りから学ぶ自己成長につながるだけでなく、他者への寛容さにもつながっていくのである。

競争が激化する現在は、「勝ち組、負け組」という言葉が流行語になるほど殺伐とした時代である。しかし、今の自分があるのは、多くの人に支えられ、ときに他者とぶつかり合いながら確立していった所産なのである。他者の存在を意識することは、閉塞的な社会を打破する突破口になるとも考えられる。他者に育ててもらったという実感こそが、自らの力を社会のために活用したい、社会に恩返しをしたいという社会貢献を生むのである。

おわりに

本研究において、教育的アプローチに最も強く影響を与えている事柄は、経験ではなく、

その経験に対する省察や、そこから編み出された対処法であるということが明らかになった。経験や自らの行動がもたらした経験に対して意味づけを行うことにより、人は人生観や信念、価値観を形成していく。教育的アプローチを行う際、それらが教育実践や指導に大きな影響を及ぼしているのである。B 教諭は自らの経験を見つめ、それに意味づけを行うことにより「許す」指導を確立していった。本稿では、それを確立していく流れに沿って、心情の変化を追うことができたと考える。

しかし、本研究において明らかにした B 教諭のライフストーリーが、高等学校へ進学した後のみとなっている点は悔やまれる。自己の経験、とりわけ失敗にどのように対処するかということは、それまでに歩んできた人生が大きく関わっている可能性もある。それゆえ、その対処に影響を及ぼした事柄にこそ核心が存在するとすると仮定すれば、本研究はある意味では不十分なものである。幼少期や学童期に関してヒアリングを行ったり、ご両親をはじめとする家族が B 教諭に与えた影響について考察したりすることができなかったことは、本研究の弱みである。以上の反省を踏まえ、今後は研究のテーマとは一見関わりの薄いと思われる点にも着目し、ヒアリングを行っていききたい。人生は点と点を結んだ線ではなく、点と点を結んだ線が無数に絡み合ったものである。対象者の人生を多角度から捉え、対象者のアイデンティティが形成された所以を丁寧に紐解いていく質的調査を行っていききたいと思う。

#### 〈謝辞〉

お時間を割いて貴重なお話を聞かせてくださった B 教諭にこの場をかりて、お礼申し上げます。

※本稿は、児美川と定による共著である。対象の教師からのインタビュー調査および

その分析は定が行い、脱稿にあたり、両者で意見交換と論述の摺り合わせを行った。文責は両名にあるが、論考のオリジナリティは定に属するものである。

#### 引用文献

- 稲垣忠彦ほか編「教師のライフコース」東京大学出版会 1988 年
- 児美川孝一郎・白井章詞「教師として戦前・戦後を生きる」法政大学キャリアデザイン学部 法政大学教職課程委員会／資格課程委員会『法政大学教職資格課程年報』Vol.4 2007 年
- 児美川孝一郎・古市好文「人間として『教師』を生きる」法政大学キャリアデザイン学部 法政大学教職課程委員会／資格課程委員会『法政大学教職資格課程年報』Vol.5 2008 年
- 志水宏吉「塾も図書館もない秋田の子どもが、なぜ全国一の学力なのか」『日本の論点 2011』一文藝春秋 2010 年
- 塚田守「受験体制と教師のライフコース」多賀出版 1998 年
- 山崎準二「教師のライフコース研究」創風社 2002 年